

西国第十三番 石光山

御本尊／如意輪観世音菩薩 開基／良弁僧正

東寺真言宗 石山寺

ほとけのちかい

おもきいしやま

座主 鷲尾龍華

——のちのよを ねがうこ
ころは かろくとも ほとけ
のちかい おもきいしやま
これは、巡礼の方々が石山
寺の観音さまを賛嘆してお唱
えされる御詠歌です。

後の世とは、わたしたちの身
体が最期の時を迎え、やがて
死にゆく、その先のことです。
生まれ変わるのか、それとも
浄土へ向かうのか。亡くなっ
た後のことを考えずに、心を

修めることなく過ごしてい
ても、石山寺の観音さまはそう
いう人をも救おうと、誓いを
たててくださったのだ、と御
詠歌では詠われます。

桃山時代、石山寺の数々の
お堂を修復・再建された淀（よ
ど）殿（どの）は、本堂の相（あ
い）の間に伽藍（がらん）再
興（さいこう）記念の扁額（へ
んがく）を残されています。
そこには、「當寺諸伽藍者……

為二世安樂御再興也（このお
寺の伽藍を再興したのは、二
世安樂のためである）」と書
かれています。二世安樂とは、
自分の生きているこの生と、
亡くなった後がどちらも安樂
であるように、という意味で
す。

淀殿という人は戦乱の世に
生まれ、父親を亡くし、後ろ
盾をなくし、母親も亡くし、
かつての敵方に嫁ぎ……現代

の私たちからすると、信じら
れないような境遇に生きてい
ました。だからこそ、彼女が
自身の安樂を切に願ったので
はなかるうか、と想像します。

今の時代、私たちは死んだ
後のことを思う機会は多くあ
りません。病気になるたとき、

老いを感じたとき、身近な人
が亡くなったとき……その瞬
間に、今の自分の生は、確か
なものではないのだと突然氣
がつくのだらうと思います。
死後について何も考えてこな
かったということを後悔する

人もいるのかもしれませんが。
あるいは、そのことに氣がつか
ないうちに亡くなってしま
うという人もいるでしょう。

ですが、石山の観音さまは
どんな心の持ち主であつて
も、残さず救われると御詠歌
はいうのです。誰にも打ち明
けることのできない苦しみの
声を、観音さまが見てくだ
さっている。それは大きな救
いだと思うのです。

思うようにならないこの世
を生きるとき、ふと氣がつい
てからが仏の道なのでしょ
う。心が自ずと仏に向かつて
いき、その道のなかで正しく
生きようと、いつしか心救わ
れていくのが、巡礼の旅路な
のだらうと考えています。

